

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：21601  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2013～2016  
課題番号：25871163  
研究課題名(和文) 乳がんサバイバーとして地域で生きていく生活の質を高める包括的支援システムの構築

研究課題名(英文) Construction of a comprehensive support system that raises the quality of life of breast cancer survivors living in the local community

研究代表者  
山手 美和 (Yamate, Miwa)  
福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：80347202  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、乳がん罹患に起因する問題にピアサポートを活用しながら、乳がんサバイバーとして地域で生きていく生活の質を高める包括的支援システムを構築することである。【研究A】研究対象者は、Cancer Net Japan主催の「がん体験者コーディネーター養成講座」を受講しピアサポーターとして活動している乳がん患者10名。データ収集は半構成面接法で、質的帰納的分析を行った。【研究B】ピアサポートを受けた乳がん患者26名と受けていない患者80名に対して質問紙調査を行った。本研究結果から、乳がん体験者として乳がん患者、ピアサポーターの双方の生活の質を考慮に入れた支援体制の整備の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present study was to construct a comprehensive support system that raises the quality of life of breast cancer survivors living in the local community using peer support for issues associated with breast cancer. 【Study A】The subjects of the study were 10 patients with breast cancer who participated in the "Cancer Survivor Coordinator Training Course" sponsored by Cancer Net Japan and were acting as peer supporters. Data were collected using semi-structured interviews, and a qualitative inductive analysis was performed. 【Study B】A questionnaire was administered to 28 patients with breast cancer who received peer support and 80 patients who did not receive it. The results of the present study suggest the necessity of developing a support system that takes into account the quality of life of both breast cancer patients and peer supporters as persons who have experienced cancer.

研究分野：がん看護学

キーワード：乳がん サバイバー 生活の質 包括的支援システム

### 1. 研究開始当初の背景

近年の動向を見ると、乳がんの罹患率・死亡率は共に上昇しており、乳がんの好発年齢である壮年期の女性の健康問題として重要な課題となっている。乳がんの特徴として、初期治療後 10 年以上が経過しても、再発・転移の可能性があるため長期的な経過観察が必要である。乳がん治療を受けながら地域で生活することは、乳がん患者と家族の生活のみならず、親族、友人、近隣者、勤務先など地域社会のネットワークへ影響が及ぶ。壮年期は、家庭内外において中心的な役割を担っていることが多く、乳がん患者は、さまざまな問題に対処しつつ外来での治療を継続し、地域で生活を送っているといえる。そのため、乳がんと診断された時から継続的かつ包括的な支援が必要であると考えられる。

2012 年に見直された「がん対策推進基本計画」において、がんに関する相談支援と情報提供があげられており、「がん患者の不安や悩みを軽減するためには、がんを体験した者もがん患者に対する相談支援に参加することが必要であることから、国と地方公共団体等はピアサポートを推進するための研修を実施するなど、がん患者・経験者との協働を進め、ピアサポートをさらに充実するよう努める」と述べられている(厚生労働省, 2012)。

これを受けて、がん総合相談に携わる者に対する研修プログラム策定事業(公益財団法人日本対がん協会, 2013)が展開され、ピアサポーターの研修プログラムや研修テキストが作成されている。また、患者団体や NPO 法人、医療機関等などにおいて、がんサロンやがん患者のサポートプログラム等、ピアサポートプログラムが実施されており、がん患者に対するピアサポート事業は展開・発展している。また、ピアサポートを中心とした相談支援機能の充実、外来看護機能の拡大と充実、診断時から終末期に至る継続的な支援体制、病棟 - 外来 - 地域の連携の充実など継続

的かつ包括的な支援体制を整備などに関する提言を行っていくことができると考える。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、乳がん罹患に起因する問題にピアサポートを活用しながら、乳がんサバイバーとして地域で生きていく生活の質を高める包括的支援システムを構築することである。

### 3. 研究の方法

本研究は、下記の【研究 A】【研究 B】に大別できる。

#### 【研究 A】

##### (1) 研究対象者

Cancer Net Japan 主催の「がん体験者コーディネーター養成講座」を受講しピアサポーターとして活動している乳がん患者 10 名であった。

##### (2) データ収集方法

面接ガイドに基づく半構成面接法とし研究者 1 名が研究対象者 1 名に対して 2 回行った。面接時間は平均 32 分だった。半構成面接ガイドの内容は次の 6 項目を設定した。i. ピアサポーターになろうと思ったきっかけ、. ピアサポーターとして活動していく上での感じている困難や戸惑い、. ピアサポート活動を行っている際の態度、. がん患者がピアサポートを活用する意義、. ピアサポーターとして活動していくための支援、. ピアサポーターの活動を通じた自分の成長について。

##### (3) データ分析方法

データ分析は、意味内容が類似しているものを共同研究者間で討議しながら帰納的に分析した。

#### 【研究 B】

##### (1) 研究対象者：

乳がん体験者からピアサポートを受けた乳がん患者 28 名と外来通院中の乳がん患者 80 名であった。

## (2)調査内容

ピアサポートを受けた乳がん患者に対しては、年齢、職業、家族構成、治療内容、再発の有無、ピアサポートを受けた回数、ピアサポートを受けようと思ったきっかけ、相談しやすい環境、相談者のペースに合わせた関わり、相談者への態度、適切な情報提供の方法、満足感に関する内容の8項目を設定した。ピアサポートの評価に関する項目は5段階のリッカート尺度とし、また、その評価をした理由について自由記述してもらった。

(2)外来治療通院中の乳がん患者に対しては、医師からの病状・治療の説明の理解、日常生活での困難感、同病者との関わりの希望、相談相手の希望の有無、同病者との交流の機会の5項目を設定した。治療を受ける中の思いに関する項目は5段階のリッカート尺度とし、また、その評価をした理由について自由記述してもらった。

## 3)データ収集方法

自記式無記名式質問紙法。質問紙は郵送法または院内に設置した回収箱にて回収した。

## 4)データ分析方法

研究対象者の背景は、SPSSver19.0にて記述統計を行った。また、記述内容については、内容分析を行ない共同研究者間で討議した。

## 4.研究成果

### 【研究A】

#### 1)ピアサポートの場の意義

ピアサポーターは、乳がん患者にとってのピアサポートの場の意義として、下記の5つのような意義があると捉えていた。

感情を吐き出せる場、がんのことを考えない時間・空間としての場、がんと共に生きていくための術を見つける場、一歩前に進むための場所、生きる希望を見つける場、自分自身が成長する場

## 2)ピアサポートを行っていく上での困難感・戸惑い

ピアサポートを行っていく上での困難感・戸惑いとして7カテゴリーが抽出された。

私の経験を話す範囲を決めかねる、同じ体験がないとピアとして分かり合えない、相談者に信頼を得るために新しい知識を得ていく、相談内容に対する答えの適切さ、相談者の悩みが自分の経験と重なる、ピアサポーターとしての活動の曖昧さ、病院の中でのピアサポーターの位置づけの曖昧さ

### 【研究B】

#### (1)ピアサポートを受けた乳がん患者のピアサポートに対する評価

ピアサポートを受けようと思ったきっかけ

最も多かった回答は、「話を聞いてほしかった」13名であり、その内容として、不安の解消や病気をどのように乗り越えていけばいいのかなど話を聞いてほしかったという回答があった。

話しやすい環境(複数回答)

話しやすい環境だったかという質問に対して、「とても話しやすかった」と回答したものは23名であり、その理由として、「サポーターの方がいつも優しく接してくれる」「丁寧に話を聞いてくれる」などがあった。相談者のペースに合わせた関わり

あなたの話すペースにあわせて、話を聞いてくれたと思いますかという質問に対する回答は、「とてもそう思う」22名、「そう思う」3名と回答があった。その理由として、親身になってくれる」などがあった。

相談者への態度

ピアサポーターが共感してくれているかという質問に対する回答は、「とてもそう思う」19名、「そう思う」7名であり、その理由として、「親身になってくれた」「ピアサポーターの方の体験も話してくれ

て救いになった」などがあった。

あなたがお話したいことを、十分にお話できたと思いますか という質問に対する回答は、「とてもそう思う」18名、「そう思う」7名であり、その理由として、「担当の医師に聞けないことを聞いてもらえた」「ゆっくりとできる」「精神的にサポートをしてもらえていると感じている」などがあった。

#### 適切な情報提供の方法

あなたがほしいと思った情報を提供してもらえたと思いますか という質問に対する回答は、「とてもそう思う」16名、「そう思う」9名であり、その理由として、「自分が望んで情報を得ようと行動を起こすと、より以上の情報をもらった」「体験者の話を聞いて、その通りに経過していくので心配することがなかった」などがあった。

#### 満足感

ピアサポートを利用してよかったですか という質問に対する回答は、「とてもよかった」23名、「よかった」2名であり、その理由として、「利用していなければ、前向きに病気と闘っていく気持ちも出てこなかったと思う」「精神的にも楽になれている」などがあった。

## 2) 外来治療通院中の乳がん患者のピアサポートに関する内容

#### 日常生活での困難感

日々の生活の中で、乳がんと向き合うに当たり、困ったと思うことはありますか という質問に対する回答は、「強くそう思う」5名、「まあそう思う」14名、「そう思う」16名であり、その理由として、「温泉・銭湯などで人の目が気になる」「子どものこと」「症状・治療に対する不安」「再発・転移の心配」「仕事のこと」などがあった。

#### 相談相手の希望の有無

誰かに心ゆくまで話を聞いてもらいたいと思うことはありますか という質問に対する回答は、「強くそう思う」9名、「まあそ

う思う」15名、「そう思う」9名であり、その理由としては、「強くそう思う」「まあそう思う」「そう思う」と回答した者は、「再発・転移、病気のことなど話を聞いてほしい、話すとなれると思うから」「家族に本音を話せば家族も辛くなるから」があった。「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した者は、「家族や友人などに十分に話を聞いてもらっている」「他人に話しても分からない」「辛くない・悩みがない」「同じ病気の姉妹を見ている」などの回答があった。

#### 乳がん患者との関わりの希望

病状や治療について、乳がんを体験した方から話を聞きたいと思うことはありますか という質問に対する回答は、「強くそう思う」6名、「まあそう思う」18名、「そう思う」17名であり、その理由は、「自分と同じ状況の体験者から聞いてみたい」「今後の経過を聞いてみたい」「前向きになれるような話が聞いてみたい」であった。

#### がん患者との交流の機会の有無

乳がんまたはがんを体験した方と交流をもつ機会がありますか という質問に対する回答は、「はい」が34名、「いいえ」が29名、無回答3名であった。

「はい」と回答した者で、交流をもつ機会の内容について質問したところ、「同室だった方または同じ病院に入院・または外来通院している方」「がんを経験した友人」「がん患者サロン」「家族・姉妹」であった(複数回答)。「いいえ」と回答した者に対して、乳がんまたはがん体験者と交流したいと思いますか と自由記載にて質問したところ、「交流したいと思わない」「機会があれば交流したい」「交流したい」「今はそのような心境・状況ではない」であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計8件)

小島彩愛, 山手美和, 川上祥子: ピアサポーターがピアサポートを継続している支え, 第 30 回日本がん看護学会学術集会講演集, 2016

岩崎希, 山手美和, 川上祥子, 波多江優, 梅田恵: 乳がん患者が捉えた医師の説明の理解度と乳がん体験者との交流への認識の実態, 第 30 回日本がん看護学会学術集会講演集, 2016

山手美和, 川上祥子, 波多江優, 梅田恵, 岩瀬哲: ピアサポートを受けた乳がん患者が捉えたピアサポートの評価, 第 29 回日本がん看護学会学術集会講演集, 240, 2015

Miwa yamate, Nozomi Iwasaki, Sachiko Kawakami, Megumi Umeda, Suguru Hatae, Satoru Iwase: Feelings of difficulty experienced by Breast cancer patients in the treatment process and perceptions of interactions with Breast cancer survivors in Japan, Oncology Nursing Society 40<sup>th</sup> Annual Congress, 2015, (USA, Orland, FL)

山手美和, 川上祥子, 梅田恵, 波多江優, 岩瀬哲: ピアサポーターの来談者への関わり方とピアサポートを継続していくために心がけていること, 第 19 回日本緩和医療学会学術大会講演集, 371, 2014

川上祥子, 波多江優, 山手美和, 梅田恵, 岩瀬哲: がん診療連携拠点病院でのピアサポート普及の課題, 第 19 回日本緩和医療学会学術大会講演集, 396, 2014

Miwa Yamate, Sachiko Kawakami, Megumi Umeda, Suguru Hatae, Satoru Iwase: Motivation for breast cancer survivors to continue peer support activities. The 18<sup>th</sup> International Conference on Cancer Nursing, 100, 2014

Miwa Yamate, Megumi Umeda, Sachiko Kawakami, Satoru Iwase: Difficulty of Cancer Survivors' Peer Support Activities, The 1<sup>th</sup> Asia Oncology Nursing Conference, 2013

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山手 美和(YAMATE, Miwa)  
福島県立医科大学看護学部・教授  
研究者番号: 80347202